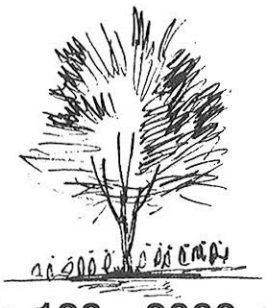
ひかりのこ

光の子



No.128　2008. 1. 1

●一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。
だが、死ねば、多くの実を結ぶ。（ヨハネ福音書12章24節）

謹賀新年
本年もどうぞよろしくお願い申し上げます
社会福祉法人　光の子どもの家

「まゆ玉」　挿絵・中島英子

「初山河」

みどりごの鳴き声ゆたに初山河
ふところの念珠だいじに日向ぼこ
冬耕のいつも遠くにひとりかな
ばらまいたやうに小舟や寒日和
綿虫に日暮れを急ぐ水面あり
千社札斜めに冬の深みけり
雪くると騒立ちそめし山の木々

黛　執（『春野』主宰）

発行／社会福祉法人　光の子どもの家　TEL/0480-72-3883　FAX/72-6649　振替／00130-1-128022
編集／光の子　編集委員会　〒349-1155 北埼玉郡大利根町砂原277　印刷／プリンティング瑛和

負を抱える

菅原哲男

謹賀新年

二〇〇八年の年頭に当たり、改めて私たちのはたらきの基本について思いを致したい。

家庭に何らかの事情があり家族と共に暮らすことのできない子どもたちをお預かりして育てていくのが私たちのはたらきである。自明だが何度でも確認しながら追求していかなければならないことでもある。

しかし、開設以来四半世紀になんなんとする年月の中で、ともすれば目標が見えなくなり、いつの間にか労苦よりは「私」の快を求めることになってしまう時間や空間を見いだすことは易くて稀ではない。

施設内での不適切な関わりが世間の耳目に曝される施設が減らず増加の一途でもある昨今である。光の子どもの家においても詳細な何々を検証するならば全く完全な関わりをしていると言い切れない。毎日毎年一日の終わり床に伏す頃に省みると、何と多くの悔恨にうち砕かれることだろう。うまくいったはたらきなど探しようもないほど僅少であるのだ。そんな毎日を二三年も積み重ねてきたのである。私たちの手柄など探しようもないのだ。

一般の家庭に限りなく近接することをめざしてきた光の子どもの家は、間取りや家の形など「普通の家」を下敷きにつくられてきた。だから、人と人との「あいだ」も普通の家族に限りなく近い。普通の家にあるトラブルや摩擦は当然ある。その中で子どもたちが息づき、感じ合い育っていくのである。完璧な家族など最初からありはしないのだ。そんな中で、大人も子どもたちも間違いを改め、謝り、赦し、そして成長していくのである。それが、児童養護施設に課せられた役割だと考えてきた。

よりよくありたいと願いながら、それに反する言動の累積のなかで、子どもたちが育ち、自立をめざしている現実には、巨いなるもののはたらきを感得するばかりである。

子育ては誰にとっても難事業である。加えて他人様の子どもを預かり育てようなどという身の程知らずな願いを持って私たちはここに来た。その願いは最初からほとんど不可能に近いものである。不可能な願いを実現するという矛盾に満ちたはたらきは、易々と出来るはずもないことをまず確認したい。

人格の豊かさは、どれだけ矛盾を抱えることが出来るかにかかっていると言い続けてきた。具体的な子育ての現場で、迷うものである。そこに複数の選択肢があったとき、最も困難なものを選択する決断への勇気を持つということである。

世は挙げて物質的なモノやカネを追い求め、出来るだけ楽に生きようともがき苦しんでいる無痛文明社会である。そこでは沢山のモノカネを得たものを勝ち組という。しかし私たちは、どれぐらいそれらを必要としている人々に与えることが出来たかを豊かさの指標と確認してきた。

ここに集まった子どもたちは、絶望的な苦難や逃れられない不条理な時間と空間を息づきながらそれらを抱え生きてきた。どんなに私たちが労苦を重ねたとしても、彼らのそれには遠く及ばないのだ。そして彼らはそれを誇らないばかりか、恥じてさえいる。そんな彼らに畏敬の念を新たにするものである。

今年のスタートである新年。抱負を持ち決意のなかでそれを語る。

抱負とは、心の中にいだいている決意や志望、と大辞林にある。決意や志望、今年はこうありたいという願いを表す言葉が抱負なのである。

徹底的な負を抱えている子どもたちの負を、意志的に共に負うことで、はじめて彼らと共に私たちは成長し前進することが可能になる。

この一年、プラスではなく、どれだけの『負』を、誰のために抱えることが出来るのだろうか。それが私たちが持たなければならない決意であり志望なのである。

学者もどきのつぶやき ⑩③

ただいま訓練中（その二）

山形大学
前学長　仙道　富士郎

前号では、私がいま駒ヶ根市の青年海外協力隊訓練所で訓練を受けていることを述べた。今回は、そこでの私も含めた人間模様について触れてみたい。

青年海外協力隊（以下協力隊）の諸君、特に女子は元気がよく、実に積極性に富んでいる。

派遣候補者は、生活の一つの単位となる十五名からなる班が中心となって色々なことをするのだが、普通日本人は班長などを引き受けたがらない。ところが、女子協力隊員を中心に班長候補が目白しなのである。

また挨拶が良い。どこで、いつ会っても気持の良い挨拶が返ってくる。こんなに挨拶の良い人間集団に私はこれまで会ったことがない。

いま若者のマナーの悪さ等が取りざたされているが、訓練所の若者たちに関する限り、そのことは全く当てはまらない。わが国の若者の種々の行動、発言などから若者たちを分類すると、その分布は正規分布を示すと思われるが、いま訓練を受けている協力隊の諸君は、正規分布の裾野の1％以下のところに位置するに違いない。とにかく、特異な若者の集団なのである。

言葉もよく通じない外国に一人で出かけて行って、そこで活躍しようとする若者たちであるから、当然なのかもしれない。

しかし、人のためになりたいという、いわゆるボランテイア精神に凝り固まっている人たちが全部かというと、必ずしもそうではないようで、なにか自分の方向転換を求めて、協力隊に応募したという感じの諸君も見受ける。

多くの諸君が勤め先を退職して参加しており、帰国後の再就職のことが、彼ら、彼女らの最大の悩みであるように見受けられる。

こんなに積極性に富み、手探りをしながら、外国で二年間も過ごすことのできた若者を、なぜ企業や公共団体はそんなに採用しないのか、私は不思議に思った。

協力隊ＯＢで、今回シニアボランティアに応募した方と話したとき、彼は「協力隊経験者は、就職してもすぐ止めてしまうから、評判が良くないのでは」と言い、また「協力隊あがり」という言葉があることを教えてくれた。

少し肯いた。終身雇用が原則で、年功序列を尊んでいた一時代前の企業にとっては、確かに協力隊経験者は御しにくかったかもしれない。しかし、グローバル化の時代で、前に進もうとする気概が求められている今、彼らこそ、わが国再生の旗手のように思えてならない。

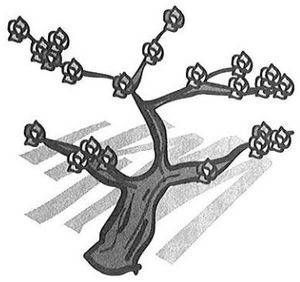
それは単に企業が競争に勝つといったことだけのためではなく、人を人として扱う社会の到来に彼らが大きな役割を果たすことが、期待されると思う（全体として、少し協力隊の諸君を誉めすぎたかなあー）。

さて、「そんなことを言っているおまえはどうなのだ」という声が聞こえてくる。

私はと言えば、シニアボランティア応募の動機はそんな立派なものでなく、「学長までした人が偉いですねえ」等と言われると、穴に逃げ込みたい衝動に駆られるのだが、今回の選択は、結果的には、人生晩年の最良の選択だったと思っている。

学ぶことの尊さ、その大変さ、そして記憶力の減退から一気には進んではいかないが、少しずつスペイン語を憶えていくことの快感などを齢七十歳にして味わうことが出来る私は幸せ者だと思っている。

かくなる上は、後半の30日も是非頑張って、かなり多額の税金を使わせてもらって獲得した（出来るかな？）スペイン語を駆使して（出来るかな？）、渾身の力を込めて、シニアボランティアとして活躍しなければなるまい。（いまの精神状態から、どうしても肩に力のはいった文章になってしまったこと、お許し願いたい。）



「ことば」を聞き、「ことば」に聞く

日本キリスト教団 東大宮教会　永野　三恵

主よ、あなたの慈しみは天に
あなたの真実は大空に満ちている。
恵みの御業は神の山々のよう
あなたの裁きは大いなる深淵
主よ、あなたは人をも獣をも救われる。
神よ、慈しみはいかに貴いことか。
あなたの翼の陰に人の子等は身を寄せ
あなたの家にしたたる恵みに潤い
あなたの甘美な流れに渇きを癒す。
命の泉はあなたにあり
あなたの光に、わたしたちは光を見る。
（詩編　三六・六～一〇）

新しい年を迎えました。

昨年は人の道ここまで落ちてしまったのかと嘆き、その一方でどんな悲惨なニュースにも驚かなくなってしまった自分の心の鈍感さに絶望にも似た思いがした一年でした。

東大宮教会の教会学校では、昨年の四月から旧約聖書を学んでいます。

神さまに背を向け、自分中心にしか生きられない愚かな人間の姿が、これでもかこれでもかと示されています。

まさに、二十一世紀の私たちの姿そのものです。このような時代だからこそ、私たちの〝命の泉はあなたにあり、あなたの光にわたしたちは光を見る〟との聖句に基を置いた歩みがどんなに確かなものであるか示されているように思います。

前施設長の菅原哲男さんから「光の子」の原稿を再度ピンチヒッターとして依頼され、優柔不断な私はまた拙文を寄せることになりました。

幸いなことに私の周囲には常に子どもが居て、さまざまな様相を見せてくれます。

昨年から私は一週間に一度だけですが、公立小学校の五年生のクラスに入っています。それは学級崩壊寸前のクラスの先生を精神的に支え、子どもたちを見守り適切な言葉かけや助言をし、学習の援助をするのです。

私がみているのはほんの少数の子どもの姿かもしれませんが、この時代の子どもの問題が浮き彫りにされていると思います。

まず、先生や友だちの話を聞くことができない。知識を学ぼうとする意欲や知る喜びの感動が少ない。ひとりひとりの子どもを見ればそんなに問題はないのですが、〝自分さえ良ければ…〟と勝手に振る舞う子どもが多くなればクラスとしての授業に支障をきたします。

また更にこの頃では〝モンスターペアレント〟と名付けられている〝我が子だけが大事〟とする困った親が、子どもに注意するどころか先生や学校を非難する始末です。

やはり、子どもの姿がおかしくなっているのは私たち大人の生き様が全うではないからだとつくづく思わされます。

自分のことばかり主張する子どもや大人の声だけ響く所では、静かに耳を傾けて聞くことばの思いや深さを感じ取ることはできません。

「ことばを聞く」という事では、教会はまさにその場所です。教会では神さまのことばが牧師を通して語られ、聖霊の働きにより生きた力あることばとして、私たちの鈍い心を揺さぶり私たちに生きる道を示して下さるのです。それは学校では決して聞くことのないことばです。しかし、そのことばの種は子どもの中で暖められ、芽ばえ育ち生きた力となり、子どもの生き方を支えていくと確信しています。

光の子どもの家の三才から高校三年生までの三十六名の子どもたちは、日曜日には教会学校の礼拝に通い〝聞く〟ことに集中しています。子どもたちは巣立ち、新しい子どもたちが通い続けているその継続した時の積み重ねによって、子どもたちは確実に養われていると実感しています。

子どもたちと共に、今年もこの世の暗闇に覆われることのない光の中を慎ましく歩んでいきたいと願っています。

慈しみと恵みに満ちた一年となりますよう。

エッセイ

人間国宝と額縁

彫刻家　中島　睦雄

テレビを見ても新聞を見ても、暗いニュースが連日報じられて、悲しい。

そんな中、十月の或る日、一通の手紙が届いた。東京練馬区立美術館で行われる「名作誕生―巨匠たちのアトリエ展」という催し物の案内である。これは嬉しい。

発信者は、この展覧会に作品を出している人間国宝、木工芸の大坂弘道君である。

この展覧会は、練馬に関係の深い作家のうち、文化勲章受章者、文化功労者、重要無形文化財保持者（人間国宝）などの代表作を八十点程展示するもので、それぞれ、著名な作家名を見ただけで、大変な展覧会だということがわかる。

これは見逃すことができない。

幾日か後、同級生の杉山君から電話がきた。「十月九日に巨匠展を見に行くんだが、むっさんも来いよ、山下もくるんだ。」と言う。「おお、良いよ。」と答えておいた。

大坂弘道、杉山汎、山下幸夫と、みんな学生時代の同級生で、机を並べて学んだ（いやむしろ一緒に遊んだ）仲間である。

大坂君は、以前、日本伝統工芸展というのに木工の作品を出品していた。そこで、一九七九年（昭和五十四年）に出品した《菱形木画箱》という作品が、日本伝統工芸会総裁賞というのを受賞した。この作品の新鮮さは、専門家の間に衝撃的な驚きを与えたという。

私も会場でこれを見たのだが、一見して実に美しい作品であった。話を聞いてみると、材料は黒柿、桑、黄楊（つげ）、紫檀などを組み合わせたもので、まあ、何とも言いようのない美しさである。奇抜な色や形、或いは変な新しさで注目をあつめるものでなく、五百年、千年以上の伝統の上に立つものであって、我々にはどう見ても人間わざとは思われない程である。

この作品が文化庁の注目するところとなり、正倉院の御物の中の、とりわけ細密な技術が施されている《紫檀木画箱》の復元模造の製作を依頼された。世界に誇りうる国宝中の国宝の復元である。

彼は、この製作に何ヶ月という単位ではなく、年単位で材料の研究、技法の研究を重ね、完璧に作りあげてしまった。この製作を通して、今まで知られていなかった材料の使用や技法などを、彼が発見したそうである。

その後彼は、人間国宝に指定されたのだが、ますます素晴らしい彼独自の作品を生み出していった。

我々は、大坂君と一緒に展覧会を見てまわった。日本画にしても洋画にしても、みんな素晴らしい。もち論、大坂君の木工作品は一種の神わざだから、その材料や技法などの説明を聞いても、我々には良くわからない。ただ、驚くばかりである。

「おれの所に寄っていけよ。」という大坂君の誘いで、杉山、山下君と彼の部屋に行った。おびただしい材料や道具類、使い方もわからないものなども並んでいる。

いくつかの作品も手に取って見せてもらったが、それらの作品の一つ一つに彼の並々ならない研究と努力が結集したような、格調の高いものであった。

そんな時、ふと、若い頃の山下君の事を思い出していた。

彼はずっと油絵を描き続けてきて、団体展に出していた。同時に、池袋の画廊で何十回となく個展もやっている。

そこで、何回目かの個展で使った額縁を大坂君に作ってもらったのである。大坂君のことだから、いい加減には作らない。ていねいに心をこめて作ったに違いない。

絵は、大小あわせて二十五、六点。これらの絵に合わせて額縁を作るのは、これまた大変な根気がいる。しかも、使った材料が、大部分ケヤキだという。あんな堅い、重い材料で二十五、六本の額縁。いやはやである。

頼む方は軽い気持で「作ってくんねえか。」だろうし、頼まれる方も軽く「うん、いいよ。」だったろう。そんなやり取りが目に見えるようである。もち論大坂君が国宝になる前のことなのだが。

「まだあの額縁、何本か残っているの？」と私は山下君に聞いてみた。

「五、六本はあるよ。」と言う。「二、三本オレにくれよ。」と言うと、彼は「ヤだよ。」ときた。

「人間国宝に額縁を作らせて、しかも材料費だけなんて図々しい人がいるもんだなあ。」と言うと「いや、材料も全部アッチ持ちだよ。」との事。当の大坂君に「山下は材料費もよこさなかったんだって？」と言うと「うん、それでもウイスキーを一本もらったかな。」と、あっさりしている。それでお互いが納得しているのである。

いやはや、友だちってこんなものなんだろう。

今年もよろしくお願いいたします

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

皆さまの祈りとお支えのうちに、幼児四名・小学生十八名・中学生六名・高校生等八名、計三十六名と卒園生四名・職員二十一名と共に二十三回目の新年を迎えることができました。心より感謝申し上げます。

私自身施設長として二年目を迎え、判断を迫られることの多さに戸惑い、子どもたちや職員に対して、責任の重大さを日々痛感させられております。

この一年も子どもたちと共に一歩一歩確実に成長したいと思っております。これからも皆様方よりのご指導賜りますようお願い申し上げます。

新しき一年も皆様方の平安をお祈り申し上げます。

田中　郁夫

新年明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。

昨年は子どもたちも健康に過ごすことができ、何より嬉しく思います。

幼稚園の年長さんなのに、朝は担当の私が全部着替えさせて何とか登園バスに間に合っていた子が、今ではその頃より一時間も早く起き、自分で身支度を済ませ、寒い中を四十分かけて歩いて登校している姿を見ると、一年の成長を感じます。

新しいこの一年も、子どもたちの成長が楽しみです。

皆さまはどのようにお正月を過ごしていますか？

池田　祐子

明けましておめでとうございます。

卒園生も父となり、母となり、スタッフより年上が増えていくという時を重ねています。

これからも出会った全ての子どもたちの家であり続けられますよう、いのり、お支え下さい。

今年もよろしくお願いいたします。

竹花　信恵

あけましておめでとうございます。ここの所、毎年同じようなことを申し上げておりますが、やはり昨年もあっという間の一年間でした。イノシシの突進のように日々が過ぎ去って行ったように思いますが、今年はネズミのようにチョロチョロと進みたいと思います。

お酒とたばこを控え、健康管理をしっかりして頑張りたいと思います。

小西　剛史

新年明けましておめでとうございます。

旧年中は暖かいご支援を戴き心より感謝申し上げます。

クリスマスにはサンタクロースのプレゼントを心待ちにして居りましたのに、十二月二十八日は、恒例の餅つきがあり杵の音が高く園庭に響き渡り、子どもたちの歓声も明るくて、改めて沢山の方々のお支えを感謝致しました。

お正月には、卒園生が家族を連れて遊びに来たり、子どもたちはお年玉を戴いて楽しいお正月を迎えられました。年毎に遊びに来る卒園生が増えてくる姿を見て、孫を迎える気持ちで心暖まる日々です。

今年もよろしくお願い致します。

鎌田　洋子

新年明けましておめでとうございます。

日頃からのお支え感謝しています。暦は新しくなりますが、私たちを取り巻く環境は決して良い方向には行ってないと思います。

しかし子どもたちは、世の中がどうであれ、毎日を一生懸命生きて行かなければなりません。

この新しい年も、子どもたちと共に毎日を大切にして生活していきます。

今年もよろしくお願いいたします。

五木田供三

明けましておめでとうございます。旧年中の暖かいご支援を心より感謝申し上げます。

忙しい師走が足早に過ぎ、こうして子どもたちの楽しそうな笑顔に囲まれて迎えるお正月。昨年末に皆で搗いた餅を頬張りながら、ある子はコタツで温々と、またある子は外で元気に凧揚げをと、それぞれ思い思いに過ごすのんびりとしたお正月。こういった時間が「家」を作っていくのだろうと改めて思います。

そうして築いた家族の元に、卒園生は帰ってきます。皆さまのお支えがあってこその「家」。改めて感謝申し上げます。

今年もどうぞ、よろしくお願い致します。

平川　光子

明けましておめでとうございます。

光の子どもの家に来て三度目のお正月を迎えました。今年は色々なことにチャレンジしてみたいと思っています。

今まで学んだたくさんの経験を次に生かしていきたいです。

佐藤　優

新年明けましておめでとうございます。皆さまの支えによって、今年もこうして皆さまにご挨拶できることをとても嬉しく思っております。

年末から年始にかけ、クリスマスから餅つきおせちと食い道楽な日々が続いております。とても贅沢なことです。子どもたちの前には当たり前のように食べ物があふれかえっています。大人達も「もったいない」とばかりに食べては胃痛に悩まされている日々です。本当に贅沢な悩みだと思います。ですが、ここにいる子どもたちはその様なことは感じていないようです。生ゴミが大量に出ていると言うことを話しても、命を頂いていると言うことを話しても関心を持つ子は少ないです。また、関心を持ったとしても、実生活に結びつけて考えたり、実行に移したりはなかなか難しいようです。私は来年から、食べる→命を頂くと言うことを、子どもたちに丁寧に伝えていかなければと今更ながら決意しています。また、支援者の方々から頂いている食物や、品物についても感謝の気持ちをどう表していくのかを、改めて考えていかなければと思います。

今年もよろしくお願いします。

田口　貴子

明けましておめでとうございます。

皆様の暖かいご支援を心より感謝申し上げます。

この一年も皆様が健康でありますように心よりお祈りいたします。今年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

田中　要一

明けましておめでとうございます。

昨年はたくさんのご支援をありがとうございました。

私が光の子どもの家に来て、もうすぐ三年が経とうとしています。その間に出会った子どもたちは皆、それぞれのペースで、でも確実に、心も体も大きく成長しています。本当にたくましい限りです。

私のグループの子どもたちも、皆様のご支援の下、それぞれの進学先でいい顔をして頑張っていました。私はと言えば、成長は体にばかり偏りがちですが・・・。

これからもこんな調子で、仲良く健康に過ごせたらいいと思っています。

本年もどうぞ、変わらぬご支援をよろしくお願いいたします。

鈴木　晶子

明けましておめでとうございます。

去年は「体力が落ちてきた」と自分に言い訳をすることがたくさんありましたが、今年はその体力をアップさせなければならないと思います。子供たちはいつでもエネルギーに満ち溢れています。その子供たちにおいていかれることのないように、子供たちに対して良い働きができるように、自分自身を厳しく律していかねばならないと思っています。

皆様にとっても健康で、喜びに満ち溢れた年になりますことをお祈り申し上げます。どうぞ今年もよろしくお願いいたします。

積　みどり

プ・リ・ズ・ム

子どもたちの季節　仙道家

新年明けましておめでとうございます。皆様の温かいご支援により子どもたちと新年を迎えられることができ、心より感謝いたします。

大利根町の冬はとても寒いです。寒いのが大の苦手な私はマフラーをぐるぐる巻きにしたり、ズボンを二枚履いてみたり、唐辛子入りのお茶を飲んだりと毎日様々な寒さ対策をしていますがどれも効果はイマイチ。一日の中でも最も冷え込む夜は、子どもたちの布団にお邪魔して一緒に寝ています。電気あんかよりもゆたんぽより温かい子どもたち。時には毛布の取り合いになり、寝ながら蹴飛ばし合ったり、私がごろごろと転がってしまい、畳とフローリングの段差からいつの間にか落ちてしまった子どももいたり……そして、朝起きると「牧野さん毛布取らないでよ～」「夜中に落ちたんだよ～、牧野さん覚えてないの～」などクレームがしばしばです……「ごめんね～!!」。でも、夜になると一緒に布団に入り「牧野さん、ちゃんと布団掛かってる？」と心配してくれるのです。子どもたちに寄り添うはずが、寝るときはすっかり私の方が子どもたちに寄り添ってもらっています。

昨年、三月に入所した六歳の冬子にとっては光の子どもの家で過ごす初めての冬になります。クリスマス、お餅つき、お正月……と様々な行事の中で冬子らしさを発揮しています。

今年もどうぞ宜しくお願いいたします。

牧野由紀子

光の中で　佐藤家

明けましておめでとうございます。

昨年は皆様のご支援により、充実した一年が過ごせたことを感謝しています。

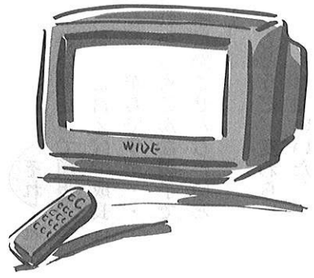
ここに来て初めての正月を迎える私ですが、実家の雰囲気とはひと味違う佐藤家です。というのも、高校受験を控えた誠君が居るということ。その存在は大きく、誠君の勉強する姿に中高生だけではなく、最年少の彬君（三歳）まで勉強道具（お絵かき帳）を持ってくるほどでした。

毎日、夜遅くまで勉強している風景は、どこか懐かしい気持ちになります。しかし、そんなことも言ってはいられません。子どもに勉強を教えるのは難しく、一度通った道でも、時というのは怖いもので、断片的な記憶しか残っていないものも…。必死に教科書と格闘する姿は受験生も驚くほど。誠君も苦手な教科にも顔を背けず立ち向かうなど、その姿は半年前とは見違えるようで、いつも感心させられます。

とはいえ、正月は、受験勉強も一休み。その日はみんなと団欒のひとときを過ごします。”こたつを出して、テレビを見る。“が佐藤家の定番。二週間も前からチャンネル争いをしていた子ども達も、正月が来ればテレビそっちのけでカードゲームをしたり、お餅を食べたりと年に一度の団欒の時を楽しんでいるようでした。

そんな和やかに迎えた新年をよりよくして行けるように頑張りますので、ご支援よろしくお願いします。

鈴木　康孝



原田家日記

新年明けましておめでとうございます。昨年中の多大なご支援に感謝いたします。

私にとって今年のお正月は、光の子どもの家で迎える初めてのお正月です。振り返ってみれば、昨年は本当にあっという間でした。

私は四月から原田家の一員となりました。最初は何も分からず、自分自身の生活で精一杯になってしまい、子どもたちを混乱させてしまうこともありました。それでも子どもたちは励ましの言葉をかけてくれ、こんな私でも彼らは必要としてくれているんだと感じました。ここに居るということが何より大切なのだと実感させてくれました。十月には、私のグループに五歳の由里が加わり、一層にぎやかになりました。私が子どもたちにしてあげられることは本当に少なく、彼らに助けられてばかりです。それでもここに居て、子どもたちと共に年を重ねて、彼らの成長を見守り続けていきたいと思います。そして自分自身も成長できるように…。

今年もどうぞよろしくお願いします。

高野真夕子

河のほとりで　倉澤家

あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願い致します。

今、倉澤家には、現実を見つめることが苦手で「夢見る少女」から抜け出せないで居る二十歳の娘、高校卒業後、五年間勤めた仕事を辞め、昨年の夏、資格取得の為、学校には行ったものの、未だ失業中の二十四歳の娘、そんな自立できず、私たちのサポートを必要とする卒園生たちが数名います。

卒園後、一度は社会に出て言っても、社会生活に適応できず、戻ってくる子。社会に出ることに臆病になり、自らここに残ることを希望する子、そんな卒園生たちであふれんばかりの光の子どもの家。自立を目標に育ててきたつもりでも、実際に自立できた子どもたちは数パーセントという事実。受容を心掛けることが過保護になっていないか。私たち自身が失敗を恐れ、臆病になっていないか。そんなことを考えながら二十数年が過ぎてしまいました。

倉澤家には、この春社会へ出て行く子が一人います。一年後の今ごろ、彼女がどんな社会人になっているか。それが、これまでの私たちの取り組みの答えだと思っています。

私たちにとって永遠の課題である「自立」。今年も「自立」に向けて、子どもたちとの日々の生活を大切にしていきたいと思っています。

倉澤　智子

季節のおとずれ　竹花家

明けましておめでとうございます。今年も宜しくお願いいたします。

この冬、竹花家の中三の美季にも「受験」という一大イベントに立ち向かわなくてはならない時期がやってきました。「勉強は苦手だから…」「高校は行きたくない…」そんな言葉が開かれた年度開始当初でしたが、美季が楽しく集中して取り組むことができる作業を中心とする学校ならばという、美季の希望にぴったり合致する学校が見つかり、美季自身、「ここでやってみたいかも」という本人の前向きな気持ちが表現され、美季なりに自分のペースで努力することができました。

「どうせ大人が決めてしまう」といったような諦めの気持ちを常に持ち続けてきたであろう彼女が、「～したい」という主体的な思いを表現できる機会は、これまでどれ位あっただろうかと考えさせられる期間でもありました。この原稿を書いている今日は、入試第一日目が終わり、明日はいよいよ二日目。美季にとって一番の心配であった面接があります。中学校の先生や穴水指導員の協力を得て、集中的に練習を重ねたこの十日間が、美季にとって少しでも自信となってくれていることを信じ、今日の成功を祈ります。美季にとって入試直前の入院などもあり、この二ヶ月間は本当に慌ただしくて、大変だったと思います。この号が出る頃には、今日明日の入試の結果は出ていますが、どちらにしても美季にとって良い経験となり、「自分で頑張れたんだよ」と笑顔で言えるような達成感を持てる機会となって、この先につながっていけば十分だと思っています。

がんばれ、美季。

遠藤　陽子

養護メモ 118

家族に関わる その21

菅原 哲男

賀正

本年もよろしくお願いします。

お正月はこの国の文化のなかで、家族的な情緒を深め養う季節である。

子どもの頃、どこかで見たような顔の遠い親戚が訪ねてきて、不沙汰を謝し新たな交わりを願うこともあったことを今も覚えている。もちろん多くはないが当時としては破格のお年玉を頂いて。親族などが疎遠な関係から親密なそれへと変えていく機会でもあったのだ。

お盆やお正月は、家族・親族と親しく交わり、自分がどんな一族に属し、地域における父祖たちのどんな流れに位置する者であるのかを確認するときであった。自分が何者でありそして家族や帰属する地域集団のどの位置にいるのかについては、我が国においてはそれ程確かめる必要性はなかった。お盆にお墓に参ると何々家の墓という墓石があり、年越しぐらいは家族で過ごし、お正月はお年始などの挨拶が交わされる。それだけで自分のアイデンティティが認識されたのである。

とりわけアイデンティティについて厳しいのはアメリカにおいてであろう。彼の国では先住の人々を除いて大半がその国以外の土地で生まれ育ち続けてきた者だったのである。自分や家族、そして始祖たちはどこで生まれ、いつこの国に来て今こうしているのだろう、という確認によって帰属する文化圏を確認し続けてきたと思われる。自分の何者性を確認することが日常的に必要になり、彼らはＩＤカードをいつも身につけ、どこの誰か分からない者が自分の領域に無断で踏み込んだ場合は、自分の家族の安全を守るため射殺しても犯罪にはならないことが常識なのである。だからアポイントメントが最重要な社会生活の知識技術となったのだろう。

家族はその人の存在を支え、生活様式としての文化を規定し、その人の人生そのものに重要な影響をもたらし続けるものなのである。

家庭に何らかの事情があって家族とともに暮らすことが出来なくなる、ということに含まれている意味は重層するのである。だから、児童養護施設で暮らす子どもたちにとっての家族も同じような層のなかにいるのだろう。そのような家族と何の関わりも持たないでその子どもの暮らしを形成していくことは不可能とも思える。だから、光の子どもの家では創立のはじめから事業計画の中心の一つに家族関係への取り組みという主題を設定して関わりを深め拡大してきた。

光の子どもの家では、お正月に家に帰省できる子どもはめっきり減ってきた。ほとんどの子どもたちは光の子どもの家で年を越し、全職員に囲まれて元旦の挨拶を交わし抱負を語り合う。食卓を飾ることに長けた調理師や栄養士らが腕によりをかけた手作りのお節を頂き、お年玉に与るとき、子どもたちに笑顔がみなぎり新しい一歩を踏み出すのである。また、家に帰ることが出来ない者の家族が来て年を越すことも稀ではない。卒業して社会に出て行った者たちも「帰って」来る。だから、光の子どもの家の人口密度が最も高いのが年越しから元旦なのである。家族や親戚を訪ねてお年始の挨拶に担当者とお出かけする者たちも増えてきてもいる。

元旦から大人たちは子どもと関わる。私たちは子どもの都合によってはたらくのである。決して賃労働という概念ではやっていない。しかし、子どもたちの顔がかがやき、その表情が豊かになるのは、まさに私たちが労苦し、困難を共に担うときなのだ。そのために光の子どもの家はつくられはたらいてきたのだ。それを四半世紀も続けて相当な結果と評価を子どもや子どもの家族たちから得ている。そのような暮らしの質量が子育ての水準を形成してきている。

日常的に、光の子どもの家の利用者である家族が間断なくここの暮らしに出入りしている。家族がどんな事情にあったとしても、自分の子どもについて関心のない者はいない。

自分の子どもがどんな暮らしをし、どんな取り扱いをされているかは家族の最大の関心事であるのだ。その関心を持つ家族を光の子どもの家は歓迎しているのである。子どもと遊び、おやつを共にし、食卓を囲み、添い寝さえするのだ。そのような状況は、職員たちにとって、暮らしの質を上げようとする機会になる。

はたらきのマニュアル化、第三者評価などどんな対策よりも、施設の子どもたちの暮らしを家族に解放することが、施設内での不適切な関わりを防ぐ優れた手立てであることを確認したい。家族力を信じて。

現場から

続・光の子らしく ㉘

岩崎 まり子

新年明けましておめでとうございます。旧年中は、大変お世話になりましてありがとうございました。

皆さん、お変わりありませんか。

先日、縁あって「典子は、今」というＤＶＤを観る機会に恵まれました。

皆さんはご存知でしょうか。サリドマイドという薬の影響を受け、両手のない体で生まれてきた典子さんが、運命を嘆き悲しむことをやめた母親と共に前向きに生きる姿を撮った作品です。

観終わった直後の興奮冷めやらぬまま、理奈と丘実と私とで入浴していたときです。理奈が言いました。

「典子さん、すごいんだよ。足で何でも出来るんだよ。習字もすごく上手なんだよ。理奈よりも、だよ。すごいよね。生まれたときから手がなかったから、足で何でも練習したんだよね。」

すると、丘実が言いました。

「でも、お母さん、すごく頑張って生んだんだよ。汗かいて、一生懸命だったよ。丘実もどんな赤ちゃんでも一生懸命生むよ。だって、赤ちゃんはみんなかわいいよね。」

「理奈もだよ。典子さんも、かわいかったよ。」

「そうだよね。赤ちゃんは皆、かわいいよね。みんな生まれて嬉しい命だよね。神さまが『生まれてきて下さい』って言わなければ、誰も生まれてこれないんだもんね。」

そう言いながら、”大人の“ 都合や見方しか出来なかった私は、彼女たちの真っ直ぐな命への肯定感にはっとさせられ、そして感動させられました。

「ママ、理奈が生まれてくれて嬉しかった？」

「嬉しいよ。とっても嬉しいよ。」

「丘実は？生まれてくれて嬉しい？」

「すっごいすっごい嬉しいよ。」

「理奈も、ママが居てくれてすっごく嬉しいよ。」

「丘実も！ママと会えて嬉しい！」

私は、二十歳まで両親と共に暮らしてきました。そこそこ、いえ、かなり愛されて育ってきたと思います。だからこそ、子どもたちに何かしらしてあげられるのではないかと思い、光の子どもの家にやってきました。

けれど、二十三年経って思うのは、いつでも子どもたちからより多くのものをもらっているのだということです。

暮らし合う中で、にらみつけられたり、返事もしてもらえなかったり、大声で言い合いをしたり、悔し泣きをしたり…。そんなことも一年通せば少なくありませんが、それでも、尊い日々を積み重ねているという実感に深い感謝を覚えます。

「今年は仕事で帰れそうにありません」「クリスマスは無理だけど、何とか正月には帰りたいと思います」――卒園生たちが当たり前のような大きな顔で帰ってくる正月に、当たり前のように大きな顔でここに居る――本当にそのぐらいのことしか出来ない私ですが、図々しく居続けることに励んでまいりたいと思います。

どうぞこの一年もよろしくお願いします。

日誌抄 ＝子どもと創る暮らしの風景＝ 2007年9月1日▶11月末日

２００７年９月
幼児４名 小学生１８名 中学生６名 高校生等８名 措置外４名
計４０名

３日　２学期始業式　夏休みのたくさんの経験が秋の実りとなるように

５日　渡部かずき記念礼拝　中学３年生となった原道小元同級生が２０名来訪午後６時より礼拝その後８時頃まで軽食と語らいの時間

９日　佐藤家がカメラマンの刀川さんのお誘いで国際フォトジャーナリズムフェスティバル２００７へ

１０日　２学期が始まってからの子どもたちの様子を確認　カリフォルニア大研修生２名の送別会

１５日　原道小学校東小学校それぞれ運動会

＜９月の物品ご寄贈者＞
小野寺律恵　小関広美　小野　島田　木村　松本明子　高橋　檜山　根本和　伊東　木田　小松　他多数の各位様

１０月

４日　田村様来訪　散髪奉仕感謝

６日　藤幼稚園運動会

１２日　福原由里ちゃん入所　今年度からここでのはたらきを始めた高野真夕子保育士が担当　初めての入所の受け入れに不安と戸惑いを感じながらも共にはたらく者たちのサポートとこの光の子どもの家に来たモチベーションを更に深めてもう一歩先のはたらきを目指す

１３～１５日　浮野俳句・浮野表紙絵・光の子表紙絵展が加須市民プラザで行われる　中島睦雄・英子夫妻の素晴らしい表紙絵と落合水尾先生の情緒溢れる句の展覧会　売り上げの一部を光の子どもの家へご寄付くださる　心より感謝

１７日　聖学院大学の学生３名が学習ボランティアとして来訪　感謝

２９～３１日　全国児童養護施設長協議会へ田中施設長と菅原哲男スーパーバイザー（ＳＶ）　暮らしの単位の小規模化を進める中で大規模施設からの意見や小規模施設化の留意点等の様々な意見が飛び交うシンポジウムに加えて分科会では現場職員の意見が活発に交わされる　他に２名の施設出身者の話で卒園後のケアの必要性を強く指摘される　最後に小説家の小檜山博氏による講演では「頂きます」「ありがとう」といった挨拶の大切さをその言葉の持つ本来の意味から再確認し子どもたちに伝えていこうというメッセージ　非常に考えさせられた３日間

＜１０月の物品ご寄贈者＞
竹内阿久利　松本明子　渋谷紀至子　小松　梅澤智恵子　篠崎　吉田かず子　川口雅資　中村和子　大越　他多数の各位様

１１月

１日　田村様来訪　散髪奉仕感謝

３日　第２３回感謝の集い　長年散髪奉仕をして下さっている田村誠様と後援会の曽根秀子様へ感謝状を贈呈　日頃からお世話になっている方々をお招きしマリンバ演奏や津軽三味線の催し物やささやかなお食事　職員それぞれが心からの感謝を伝える

６～８日　小舎制養育研究会へ田中施設長と菅原哲男ＳＶと田口貴子保育士　田中施設長は大規模から小規模に移行する際に働き方を先に検討してしまう施設に対して子どもの生活場面がまず先に検討されるべきだと強く感じた　田口保育士も同じように大規模から小規模に移行することの困難さを認識した　子どもたちの養育のあるべき姿を模索し続けることを再確認するための３日間

１９日　所沢児童相談所訪問調査

２６日　南児童相談所訪問調査

＜１１月の物品ご寄贈者＞
ヤクルト販売株式会社　須藤喜代春　木村郁子　杉山和俊　工藤美枝子　松本明子　加部芳子　落合　ダイエー　渋谷澪　岩槻教会　根本和　他多数の各位様

●昨年度中のご支援ありがとうございました。このような歩みを踏まえ新年の豊かな実りを祈っております。(洋)

反射光

☆明けましておめでとうございます☆旧年中の暖かいご支援を心より感謝申し上げます☆今号の見開きには職員ひとり一人の新年のご挨拶を載せました☆また「トムソーヤ達の朝」を長年寄せてくださっていた永野三恵さんにも一筆寄せて頂きました感謝☆この時期はクリスマスに正月と子どもたちが最も楽しみにしている冬休み☆子どもたちがゴールデンタイムを家で過ごす大切な時を迎えています☆そして家族の色が最も濃くなる時でもあります☆家族を持つ卒園生は家族を連れ一人暮らしの者は共に暮らし合う暖かさを感じにここへ帰ってきます☆光の子どもの家が「家」であり続けるための働きとは☆それは隣人の為に負を抱える働きこそがまさにそうであると思います☆世の流行ことばに踊らされる事なく子どもたちと共に語り合うことばに静かに心を寄せる一年に☆今年もよろしくお願い致します☆　（洋）